

麗らかな春なれど…

歌唱 辰巳ゆうと 「心機一転」

久仁京介

早や四月、この中旬からマスクをはずして、しかし気を付けてという試みなのか本気なのか、しかし人の顔が見られる日常になることは念願だった。これまでに悲しかったのは、どこかで初めて出会う人と名刺交換することがあっても、残念ながらその人のことを記憶できないのだ。加齢による記憶の衰えもあったりするのか、ほとんどダメ。楽しくない。

今年は3月から全国的に温かい日もあり、春本番と思わせる日が多かった。新潟は豪雪であった昭和38年よりも大雪だったのではないか。もちろんどちらも実感している訳ではないが、どうだったのか。しかし明るく爽やかな春であって欲しい。

一世代も昔か「歌は世につれ世は歌につれ」なんて、作家にも歌い手にも、歌好きの人たちにも、しあわせな言い回しがあった。また歌が世の中をざわつかせ、世相や雰囲気をリードすることもあった。遠く懐かしい話に思えます。それを過去の話だと云ってしまったら身も蓋もない。CDが売れなくなっている。

作詩家も作曲家も日々創作に邁進しています。歌い手さんも自分の歌で人々に感動を伝えたいと、日々の鍛錬や活動があります。2020年からのコロナ騒ぎ、2023年コロナ禍は4年目に入って第8波の猛威に翻弄されていました。

多くの人々が今年こそはどうにかしたい…、と気持ちを新たに望んでいるように感じた。

「心機一転」、さて誰もが知っているこの4文字熟語、人の胸に突き刺さる今年のワードではないかと感じている。

1月に発売した新曲「心機一転」を、辰巳ゆうとは大先輩氷川きよし譲りのパフォーマンスで大胆に唄っています。

「この歌詞は、事を始める前の自分に、応援歌としていつも勇気を与えてくれています」と、今年にかける思いと歌への情熱を語っていた。